

資料渉猟余話

その88

明治三十年代。正岡子規の俳句革新運動に共鳴して全国で新派(子規派)の俳句会が結成される。下伊那でも松聲会(明治31年結成)、半夜会(32年)が結成されたことが小林郊人の『伊那の俳人』に記されている。これ以外にも当時の雑誌『伊那青年』の記事などから竜丘に暮雲会、山本に若菜会という新派俳句会の存在がわかってきた。

齊は釣月の本名、釣月の投稿である。これに続き碧洲、愚生、釣月の俳句が掲載されているが、この碧洲、愚生が誰かはわからない。記事に「年少の同志」とある。記事中に「暮雲会」について紹介したい。

木下釣月と竜丘新派俳句会「暮雲会」

竹村雄次

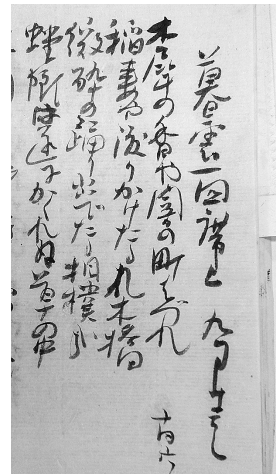
その中で、木下釣月が作った「暮雲会」について紹介したい。

「暮雲会」は、高浜虚子が東京で発刊した『ほととぎす』3巻3号(32年)の「地方俳句界」という新派結社紹介欄に投稿記事があった。記事は、

「暮雲會(信濃龍丘村)ノ年少の同志本會を起し八月十三日に其第一回を開く(下伊那郡龍丘村木下齊)」とある。木下

「代田木下両氏へ送る」という俳句会への入会を勧める手紙の下書きがあること、田、木下が碧洲、愚生である可能性が高いが、残念ながらこの代田、木下も誰なるので釣月と同年の二十歳前後の青年と想像できる。

「暮雲会」について、筆者は先に当コラム73で南信州地域資料センターに保管されている釣月の俳句についてあるが、釣月の『月光風聲』に『月光風聲』を読み



石なので、前会が開催できず、同じ題で行ったということだろ。小石投げて喧嘩となりし相撲哉」といふ愉快な句があった。

進めていくと、暮雲月六日記す」に続き会と書かれたページを四ページ見つけることができた。ページにはこれを記述した月日とともに釣月の俳句が並んでいて、釣月の暮雲会発表句であろう。これにより暮雲会の開催日や句会の題を知ることができた。

そして四つ目が「暮雲會十句集課題」の茶の花／十二月八日夜作」とあり「茶の花の匂ひや棕櫚に風もなし／茶の花や垣をめぐらす観測所等、茶の花で作った句が十句。観測所は釣月が務めていた飯田観測所だろう。

「暮雲會一回席上九月二十二日／十は十句。また句題がの後ろに「暮雲會」の字が記されている。これは「暮雲會」の題であるが、釣月の「月光風聲」を讀み

若者と俳句作りを染しんでいた姿も垣間見ることができた。